

2221 離島覚書（沖縄県宮古島）



令和4年11月27日

宮古空港

羽田からの直行便は少し遅れて11時30分ごろ宮古島空港に到着した。「全国旅行支援」の期間中ということもあり、飛行機はほぼ満席の状態であった。

宮古島を訪れるのは3度目である。最初に訪れたのはもう四半世紀も前のことで、当時水産庁の企画課が進めていた「マリノバージョン構想」づくりの仕事で来た。島では「オトリー」の歓迎を受けた。「オトリー」は与論島の「与論献奉」と同様、一杯の茶碗で泡盛を回し飲みし、それぞれ口上を述べる島の歓迎行事で、ほとんど参るほど飲まされた記憶がある。2度目は^{たらまじま}多良間島、^{みんなじま}水納島を含む周辺離島の島旅で、宮古島を拠点に回った。この時は拠点となった宮古島をあまり観察しておらず、記録も書いていなかったの、今回の島旅となった次第だ。

宮古空港は、本土の羽田、関西、中部、福岡、那覇の各空港と離島の石垣島、多良間島を結んでいる。コロナ禍で宮古島を訪れる観光客は減ったが、コロナ前の2019年には年間約100万人の観光客が訪れており、近年は石垣島に迫る勢いになっていた。観光客の大部分は宮古空港を利用しており、まさに島の玄関口になっている。

宮古島の面積は158.54 km²で、沖縄県では西表島、石垣島に次いで3番目に大きな島だ。2020年国勢調査時の人口は47,676人、石垣島をわずかにしのいで最も多い。したがって人口密度は314人/km²と沖縄県の離島の中では最も高い。なお、北方4島を除く有人離島の中では13番目に大きな島である。

宮古島は直角三角形をした隆起サンゴ礁の島で、全体に平らで大きな山はなく標高は

115m と低い。これほど大きな島なのに川らしい川はない。宮古島は「島尻マージ」と呼ばれる表土（40 cm～1 m）の下に透水性の石灰岩層があり、さらにその下に水を通さない泥岩層がある。雨水は石灰岩の中に浸み込み、石灰岩層のなかに貯水されるためだ。貯水量は石灰岩の 10%ほどらしく、飽和量を超えた水は地下水として海中に流出している。冒頭の写真に示した緑の帯は断層で地下では泥岩層が盛り上がり、この帯と帯の間の石灰岩層に、地下水が滞留している。

宮古島の周辺には伊良部島、下地島、池間島、^{くりまじま}来間島、大神島の 5 つの属島があり、大神島を除く島々は橋で結ばれている。

宮古島は^{たいら}平良市、^{ぐすくべ}城辺町、下地町、上野村に分かれていたが、2005（平成 17）年 10 月に属島の伊良部町を含めた 1 市 3 町 1 村が合併して宮古島市になった。したがって、現在は宮古島とその属島は宮古島市として包括されている。

J ネットレンタカーの事務所で軽自動車を借用し、ちょうど 12 時に営業所を出発した。道路沿いの「大和館」という地元の食堂で「てびちそば」を食べる。



赤瓦を基調とした琉球文化を色濃く表す宮古空港

市立図書館と宮古島の歴史

図書館は月曜日が休館日なので、日曜のこの日に優先して行くことにし、昼食後に直行した。

宮古島市立図書館は宮古市未来創造センター内に置かれている。図書館の他に、多目的ホール、スタジオ（3）、和室、調理室、研修室（3）、ギャラリー、公民館があり、宮古島における新しい文化拠点となっている。場所は旧市役所に近く、かつては県立病院が置かれていたところだ。2019（令和元）年 8 月にオープンしているから丸 3 年を経過している。新しい建物は沖縄県でよくみられる琉球調のデザインではなく、未来を感じさせる雰囲気醸す。2016（平成 28）年に来た時は、平良図書館と北分館に分かれていて、北分館が郷土資料に特化した図書館になっていたが、新しい図書館では一体化していた。

図書館の地下 1 階に沖縄県及び宮古島市の郷土資料が置かれているコーナーがある。ゆったりとしたスペースで書籍もかなり多い。宮古島市教育委員会発行が 2012 年に出版した「宮古島市史、第 1 巻通史編・みやこの歴史」（宮古島市史編さん委員会編）を閲覧する。

同書では宮古島市の歴史を、先史・グスク時代、古琉球（統一へ動く宮古）、近世（薩摩藩・琉球王府統治下）、近代（琉球処分から終戦まで）、現代（戦後）に分けている。この通史に沿って、宮古島の歴史を概観しておこう。

島のピンザアブ洞穴からは約 2 万 6000 年前と推定される人骨が見つかり、何処から来たのかわからないが、古くから宮古島に人が住んでいたことは確かなことだ。

グスク時代は 12 世紀前後から 14 世紀ごろを指し、城塞的遺構があることから名づけら

れた。この時代には島外から新しい文化が持ち込まれ、人々の交流がさかんとなり、鉄器の普及によって本格的な農耕社会へと移行した時期とされる。その結果、人口が増え、集落を統率する政治的な首長（天太あるいは按司・殿）が登場し、階級社会へと展開していく。

古琉球とはグスク時代を含めて 1609（慶長 14）年の薩摩侵攻までの期間とされている。14 世紀以来、宮古島は琉球王朝に朝貢し、首長に任命された与那嶺勢頭豊見親（豊見親は琉球王朝時代に宮古地方を治めた首長の称号）と宮古の騒乱を統一したとされる目黒盛豊見親の 2 つの勢力に分かれていた。その後、琉球王朝から任命される宮古島の首長は与那嶺勢頭の孫である大立大殿を経て、目黒盛の玄孫である仲宗根豊見親に引き継がれた。1500（明応 9）年に石垣島で発生した「オヤケアカハチの乱」以降は、琉球王朝の領土に組み込まれ、明治維新後の琉球処分まで、仲宗根豊見親の子孫である忠導氏、知利真良豊見親の子孫である宮金氏、与那嶺勢頭豊見親の子孫である白川氏の 3 氏が宮古島の官職を占めたという。

近世は 1609 年の薩摩藩による琉球侵攻から明治維新後の 1879（明治 12）年までの琉球処分までとされている。琉球王朝は 1628 年に宮古島を平良、下地、砂川の 3 つの間切に分け、翌 1629 年には宮古在番を設置した。1637 年には人口を調査して人頭税を導入した。宮古の百姓は、薩摩－琉球王朝－島役人の三重の支配下に置かれ、搾取と圧政に苦しんだ。

1879（明治 12）年の琉球処分から 1945（昭和 20）年の敗戦までを近代、戦後から現在までを現代と時代区分している。

図書館には軽食喫茶の店が併設されていた。図書館での閲覧とコピーを終えてからここでアイスクリームを食べた。公共施設であることからアイスクリームは 200 円と安かった。14 時 40 分に図書館を出発し、平良港に向かう。



市立図書館がある宮古市未来創造センター

平良港と史跡

図書館から海の方に坂を下った先が平良港である。宮古島の海の玄関口にあたる。古くは漲水泊と呼ばれていたが、現在は重要港湾に指定されている。

港は北から下崎地区、漲水地区、トゥリバー地区の 3 つに分かれる。下崎地区と漲水地区の間には荷川取漁港（第 2 種）が置かれ、漲水地区とトゥリバー地区の間には海水浴場や市民の憩いの場として知られるパイナガマビーチがある。

荷川取漁港の漁港用地には宮古島漁協の事務所、水産加工場、2 次加工場、鮮度保持施設（冷蔵庫）が置かれている。漁協事務所の 1 階は荷捌き場（産地魚市場）、2 階が事務スペースだ。魚市場を挟んで左側に漁船の船揚用の斜路が、右側には浮棧橋が整備され、漁船が 1 隻ずつ係留できる贅沢な施設となっている。こちらは主として大型のマグロ釣りの漁船が利用している。

女性部が中心になって営んでいたと思われる直売所もあったが、現在は使われていない

様子だった。漁協事務所の道路を挟んだ空き地に「みなと食堂」がある。組合員の奥さん方が経営しているとのことで、アーサ麵（ヒトエグサを練り込んだそば）が評判らしい。

道路沿いにいくつかの史跡が残されている。そのうちの 하나가「ぶばかり石」である。上述した通り、宮古島の人々は人頭税に苦しめられたが、この石柱よりも背が高くなったら人頭税を支払う義務を負ったというシロモノだ。案内板にもそう書かれていた。石柱の高さは1.5mほどであったから、現在の中学校を卒業した歳あたりに相当する。ただ、この話は民俗学者の柳田国男が「海南小記」に書いたことから広まったようで、実際には身長に関わりなく15～50歳の全員に課せられた。今日では、個人や法人に対する税は所得に応じて算出され所得のない人は無税であるが、人頭税は所得に関係なく一律に支払う義務を負った。この特殊な税制は薩摩藩からの重税に苦しむ琉球王朝が宮古・八重山諸島（先島諸島）の人々を対象に実施したものだ。男は粟などの穀物で、女は織物を定められた数量を課せられたのである。このような理不尽な人頭税は明治時代になっても続き、廃止されたのは1903（明治36）年のことであった。この廃止運動に尽力したのが、鹿児島県の加計呂麻島などでマベ真珠養殖を手掛けた中村十作（^{じゅうさく}1867～1943年、新潟県出身）だった。

もう一つが古琉球時代の島の支配者であった仲宗根家の墓である。こちらは国の有形文化財（建造物）に指定されている。墓室の四方を石灰岩の石垣で囲い、西側に出入口が設けられていた。階段を下った庭の北隅には井戸がある。墓には13段の階段がつくられ、横穴式とミヤガと称する古い時代の風葬墓地を折衷した様式という。

その隣には、知利真良の墓が並ぶ。やはり国の重要文化財に指定されている。この墓は宮金氏寛富という人物が1750年ごろに築造したと伝わる墓で、宮金氏の元祖である知利真良豊見親を祀っている。知利真良は1500年のオヤケアカハチの征伐軍に加わったことで知られる。墓の様式は仲宗根家の墓と同様であるが、沖縄の家に特徴的な「ひんぷん」と呼ばれる目隠しの塀の跡が残っていることから「ツンプン墓」とも呼ばれている。なお、宮古地方では「ひ」を「つ」という。



ぶばかり石（左）、知利真良豊見親の墓（右）

国道 390 号

国道 390 号は石垣島から宮古島を経由して沖縄本島の旭交差点を結ぶ国道である。宮古島の国道区間は旧城辺町の保良から平良港までの29.1 kmで、島の南側を通る。島と島を結ぶ国道は鹿児島県の種子島にもあるが、沖縄県の島間を結ぶ国道はここだけだ。国道の基点である平良港の交差点から保良にむけて、一路、国道 390 号をひた走ることにした。

国道の起点からすぐのところ「まりんぴあみやこ」という平良港ターミナルがあり、かつて伊良部島への船の発着場所となっていたが、2015（平成 27）年 1 月に伊良部大橋が架かったため現在はあまり使われていないようだ。その隣に市立アティダ市民劇場が置かれ、さらに周辺にはホテルがいくつも建っていた。

平良港の漲水地区とトゥリバー地区の間にはパイナガマビーチがあることは先に述べたが、駐車場に車を停めて浜まで降りていくと、この時期なのに海水浴客がいる。あるいは裸で寝そべっている人もいた。羽田を出る時はセーターを着てジャンパーを羽織っていたが、宮古島ではTシャツに着替えていたから宮古島は「まだ夏」であった。

少し走ると、与那覇湾に面した道路脇に沖縄製糖㈱の宮古工場が現れた。その工場の手前に島で唯一とされる崎田川が湾に流れ込んでいる。そこに「下地町の池田砦」として県の史跡に指定されている石灰岩で作られたアーチ状の石橋があった。砦とは石橋のことで、文献上の記録では 260 年余の歴史を刻んだ古い石橋とされている。崎田川はこの橋を通り、国道下を抜けて与那覇湾に注いでいるが、水量はかなり多かった。

道路の両側にはサトウキビ畑が広がる。国道の街路樹として沖縄県の代表的な樹木であるフクギの並木が続く。フクギの木には不妊処理されたウリミバエの籠が吊るされていた。まだ宮古島にはウリミバエがいるのだろうか。

そのうち旧上野村の庁舎が現れた。鉄筋コンクリートの 2 階建ての建物で、比較的新しい。庁舎の庭には「天皇皇后陛下行幸啓記念碑」と書かれた大きな石碑が建つ。平成天皇皇后陛下が 2004（平成 16）年 1 月に宮古島を視察した折に上野村にも寄ったようだ。

旧上野村を過ぎたあたりから街路樹は椰子に変わった。椰子の正式な名前を知りたかったので、道路脇のあった天麩羅屋さんの女性に聞くとわからないという。翌日、役場の建設課でも聞いたがやはりわからない。建設課の若い職員は親切な方で、後で調べて知らせてくれるといわれた。その後、電話がかかってきてマニラヤシと判明した。その名のとおりフィリピンが原産の椰子であった。



フクギの街路樹（左）、マニラヤシの街路樹（右）

そのうち「やぎ汁」ののぼりが立ち、「宴会用やぎ汁予約中」と書かれた店が現れた。宮古島に限らず、トカラ列島から奄美群島、先島諸島にかけてはヤギを食べる文化がある。

そこからさらに進んだ先の左手に宮古製糖㈱の製糖工場が現れた。道路を挟んだ反対側には「多良川」と書かれた泡盛の工場もあった。ちなみに宮古島には多良川の他に、菊之露、池間酒造、宮ノ華、渡久山酒造、沖之光のあわせて 6 つの醸造所があるらしい。

再びフクギの街路樹に代わり、間にマニラヤシとは違う別の種類の椰子が混じるように

なった。途中で圃場整備の工事現場が見られ、やがて国道の起点の保良に着いた。

サトウキビと製糖

国道の両側はほとんどサトウキビ畑だから、宮古島はまさに「サトウキビの島」といえる。ただし琉球王朝時代は、貢納物が粟であり、サトウキビは栽培されていなかった。宮古島でサトウキビの栽培が始まるのは大正期からのことで、その後次第に盛んになり、今では農業経営を支える主要作物となったわけだ。

2015年国勢調査時の産業別就業者数は20,890人、そのうち農業の就業者は3,340人で全体の16.0%を占めて最も多い。農業に次ぐのが、医療福祉(2,991人)、卸売業・小売業(2,529人)、建設業(1,946人)、宿泊業・飲食サービス(1,716人)である。漁業は91人と少ない。

宮古島市が発行している「統計みやこじま」によると、宮古島の土地面積153km²のうち畑地は91km²であり、島の59.5%を占める。このうちサトウキビの作付面積は38.9km²に及び、畑地の42.7%に及ぶ。つまり島の1/4の面積がサトウキビ畑になっている勘定だ。2020/21年期には、この土地でサトウキビが257,159トン生産された(伊良部島を除く宮古島市)。作型別では、株出が134,859トン(52.4%)で最も多く、夏植が104,927トン(40.8%)、春植が17,373トン(9.8%)であった。この年期の沖縄県全体のサトウキビ生産量は813,853トンであったので、県全体の31.6%を占めており、沖縄県の離島の中では圧倒的に生産量は高い(宮古島に次ぐ離島の産地は石垣島の85,658トンだったから、石垣島の3倍に及ぶ)。

この年期のサトウキビの生産額は56.5億円であった。サトウキビの栽培農家数は3,757戸なので、1戸あたりの平均生産額は約150万円ということになる。

旧城辺町の国道脇にはかなり広い圃場整備の工事現場が見られたが、その後、島内をまわっていると、各地で圃場整備や灌漑用水の工事が行われていた。後述する地下ダムからの灌漑施設整備が進み、宮古島の農業環境整備は大いに進んでいるようだ。昨年度末時点での圃場整備率は60.6%、畑地灌漑整備率は63.3%であり、農地の集約化が進んでいる。



旧城辺町前原地区の圃場整備の現場

サトウキビの収穫は手刈りと機械刈りに分けられるが、宮古島では、2020/21年期のハーベスターによる機械刈りが全収穫量の93.0%に及んでおり大部分が機械によって刈り取られ、2つの製糖工場に搬入されている。機械刈りは宮古地区ハーベスター運営協議会がハーベスターを保有し、農家は一定の費用を支払い、刈り取り作業を委託するシステムになっている。

収穫したサトウキビは上述した国道390号線沿いにある2つの製糖工場に搬入される。収穫時期は冬季で、12月に入ると操業することになるのだろう。

沖縄製糖(株)の宮古工場は1952(昭和27)年9月から操業を開始しており、日産能力は1,900

トンである。一方、宮古製糖(株)城辺工場は 1959 (昭和 34) 年 9 月からの操業しており、日産能力は 1,800 トンである。両製糖工場では何れも分蜜糖を生産している。分蜜糖は内地の製糖会社に供給され、この原料をもとに上白糖などの最終商品に加工される。なお沖縄製糖(株)は本社が那覇市にあり、工場はここだけだが、宮古製糖(株)の場合は宮古島以外に伊良部島と多良間島にそれぞれ工場を持っている。



国道わきのサトウキビ畑 (左)、沖縄製糖の宮古工場 (右)

東平安名崎

国道 390 号の起点となっている保良を過ぎると、島を周回する道路と島の東端に向けた細い道路に分岐する。細い道の先端が東平安名崎^{ひがしへんなぎさき}である。

幅 120~250m の細い岬が 2 km ほど続く。岬の先端付近に駐車場があり、ここに車を停める。駐車場から左に下ったところに保良漁港 (第 1 種) が整備されている。漁港には漁船は見られなかった。岬の先端に灯台があり、そこまで歩く。

この一帯は「隆起サンゴ礁海岸風衝植物群落」として沖縄県の天然記念物に指定されている。風衝とは継続的に強い風 (ここでは潮風) が吹きつける場所のことを指す。何でもテンノウメを始めとする 65 科 222 種の植物が生育しているらしい。

海には巨岩がゴロゴロとしており、独特の風景を作り出している。これと同じ風景を伊良部島でも見たことがあった。明和の大津波 (1771 年) でサンゴ礁が破壊されて巨岩となったもので「津波石」と呼ばれている。灯台に向かう道にもこの巨岩がゴロゴロしており、そのうちの一つは「mamaya no haka」と呼ばれ、その大きな岩の空洞で若い美人の娘が機織りをしていたという伝説が残るようだが、おそらくこの巨岩も津波で打ち上げられたものに違いない。

明和の大津波は八重山群島及び宮古群島に甚大な被害をもたらしたが、石垣島では最大波高が 20m ほどに及び、市内の大浜崎原公園には高さ 7.5~8 m、推定重量 700 トンの巨岩が打ち揚げられていることからみて、標高 20m ほどのこの岬に大きな岩が打ち揚げられたとしても不思議ではないからだ。

岬の先端には平安名崎灯台が置かれている。戦後の琉球政府時代に日本政府の援助により設置されたもので、1967 (昭和 42) 年に点灯した。沖縄県の本土復帰後は海上保安庁に移管された。通常、一般の人は灯台に入ることはできないが、この灯台は例外で、参観料 300 円を支払えば登ることができる。あいにく 17 時 15 分前までに入場しなければならず、残

念ながら時間を過ぎていたため叶わなかった。

17時22分に東平安名崎を出発し、帰りは島の内陸部を縦貫する県道78号を走って平良の中心市街地に戻った。ホテルニュー丸勝にチェックイン。このホテルに連泊することになる。サッカーの世界カップ、日本vsコスタリカ戦の日だったので、テレビで試合を観てから街に出た。ホテル周辺は観光客相手の居酒屋が並び、島唄ライブの店が多い。にぎやかすぎて、軽薄で、あまり気に入った店はなかった。



津波石が転がる海岸と保良漁港（左）、平安名埼灯台（右）

令和4年11月28日

宮古島市役所

朝食を食べる適当な場所がなかったので、朝飯抜きで宮古島市役所に向かう。市役所は2021（令和3）年1月4日にスタートした新しい庁舎で宮古島空港の裏に位置する。

2005（平成17）年に平良市、城辺町、下地町、伊良部町、上野村の5市町村が合併し、宮古島市が誕生したが、各課は旧市町村役場に分散して置かれていた。1カ所で用をたすのが難しいという状況だったことから、新しく土地を求め、庁舎を建設したものだという。なお、旧庁舎は平良港に近い中心市街地に残っており、レンタカーのナビはいまだに旧市役所のままだった。

新庁舎の表玄関側は来客用、裏側は職員用の広大な駐車スペースが確保されている。市の職員は約700人に及ぶ。職員の多くは車通勤なので、これだけの広さが必要だったのだろう。庁舎の敷地はサトウキビ畑を転用してつくられたようで、周辺には何もない。朝一番で訪問したから朝食が食べられる食堂や売店があることを期待したが、期待外れに終わった。

宮古島市の前市長は下地敏彦さんといった。3期12年務め、4期目も出馬するが落選し、その後、2021年5月に陸上自衛隊駐屯地の用地売却を巡る贈収賄の疑いで逮捕され、現在裁判中と聞く。下地さんは沖縄県庁の部長などを務めた後、沖縄県漁連の会長をしていた。

「水産多面的機能発揮対策事業」の立ち上げにあたってサンゴ礁保全の関係で沖縄県庁や学識経験者との調整を図っていた折、何回か沖縄県漁連を訪ねたことがあった。その時に下地さんとも食事を共にしたことがある。豪放な方であった。この新庁舎や上述した宮古市未来創造センターの建設に尽力したようだ。

新庁舎は3階建てで、執務室スペースには余裕がある。最初に2階の企画調整課で統計書を手、秘書広報課で市勢要覧をいただいた。3階にあがり、畜産課、農政課、水産課、都

市計画課でそれぞれ資料を入手し、話を聞く。教育委員会の生涯学習振興課で宮古島市史の発刊計画を尋ねた。

宮古島市役所には8時45分に入り、9時55分に出たから、1時間強いたことになる。



宮古島市役所の全景（左）、市役所の内部（右）

宮古島漁協

市役所から平良港に向かい、宮古島漁協を訪ねた。2階の事務所に伺い、名刺を差し出すと、総務課長の川満健勇さんが対応してくれた。

4半世紀前にマリノバージョン構想づくり（漁港用地の活用が課題で、現在の漁港総研一五洋建設の孫請けで受注）で、漁協と一緒に仕事をしたことを話すと、彼はちょうどそのころに漁協に採用された若手職員だったそうで、よく覚えていて、懐かしがった。たぶん名刺の水土舎という社名を思い出して、親切に迎えてくれたのだろう。

1時間ほど宮古島漁協の概要を聞く。ちなみに宮古島市には宮古島漁協の他に、池間漁協（池間島）、伊良部漁協（伊良部島）の2つの漁協があり、宮古島漁協は宮古島と来間島の漁業者によって組織されている。

宮古島漁協の組合員は、正が97人、准が407人の合計504人である。職員は15人で、購買、販売、冷凍冷蔵、製氷、加工、クルマエビ養殖自営、指導の各事業を営む。ただクルマエビ養殖は後述するように近年疾病が発生して飼育していたクルマエビが全滅したため、現在は休止している。この自営事業の担当職員が5人含まれている。ちなみにクルマエビ養殖場の場長だった人は現在、参事職に就いているとのこと。

宮古島漁協では漁業と養殖業が営まれている。それぞれの漁業・養殖業を概括しておこう。

養殖業は、モズク、アーサ（ヒトエグサ）、海ブドウ（クビレヅタ）の海藻類が養殖されている。

最も経営体数が多いのがモズク養殖で60経営体が営む。こちらは後継者が比較的多い。経営体数が最も多いのが島の北西部にあたる狩俣地区で30経営体と半分を占める。この他に少し南に下がった大浦地区、久保地区、浦底地区、久松地区、来間地区などで営まれている。モズクの種苗は人工採苗と天然採苗の両方で行われている。人工採苗は後述する宮古市の海業センターで作っているが、今年は失敗した。このようにリスクがあるので天然採苗を並行して実施しているわけだ。漁港にモズクの種付け用水槽を有するのは狩俣と久松の両地区である。モズクの漁期は11月から翌年の5月までの約半年間で、残りの半年間は漁業

などを兼業している。ちなみに狩俣地区では2隻の漁船を使った追い込み漁を共同経営している。この漁業は沖縄本島の糸満から伝わった漁法で、主としてブダイを獲っている。ちなみに伊良部島でも追い込み漁が行われているが、こちらはグルクンを対象としているという。

アーサの養殖は8経営体が営む。主として島北部の大浦湾で営まれており、モズク養殖との兼業が多い。

海ブドウは後述するように生産組合方式の陸上養殖で、現在は島北部の高野地区と狩俣地区で営まれている。

漁業は、マグロ釣り（集魚灯、パヤオ）、底もの一本釣り、潜水漁業（スキューバ、素潜り）が営まれている。金額が最も多いのがマグロ集魚灯漁業である。

マグロ釣りは、集魚灯漁業とパヤオでの釣りに分けられるが、宮古島の場合は前者がメインである。後者は伊良部島の漁船が多い。

マグロ集魚灯漁業は12～13経営体が営む。この漁業は新月を中心に集魚灯を焚いて餌となる小魚を集め、小魚を食べにくるキハダマグロを釣る仕組みだ。集魚灯を焚いてマグロを釣る漁業は今回初めて聞いたが、石垣島あたりが発祥の地で10年ほど前から始まったらしい。パヤオのマグロは数kgほどの小型のものが中心だが、集魚灯では30～50kgの大物が釣れる。集魚灯漁業は2人で操業する人もいるが、基本的には単独操業である。漁場は広く石垣島あたりまで遠征するので、1泊2日ないし2泊3日の操業になる。魚探でマグロの回遊層を確かめ、イワシやムロアジの餌を袋に入れて沈め、そこに釣り針をおろして釣る。キハダマグロの遊泳水深は200～300mである。この漁業は周年営まれているが、新月の時期が中心なので、満月を中心とした残りの半分ほどの期間は底もの一本釣りを兼業している人が多い。

一方、宮古島の漁業者でパヤオを利用している漁船は4～5隻と少ない。

底もの一本釣りは20～30経営体が営む。これに満月の時期に上述したマグロ集魚灯釣りの組合員が加わる。漁場の水深は50～100mで、アカジン、ミーバイ、シロバイ、アカマチなどのマチ類が対象である。

潜水漁業は素潜りとスキューバに分けられ、素潜りに慣れてきたらスキューバに転向するらしい。准組合員を含めた大部分の組合員が潜水漁業に従事しており、周年を通じて操業する。ボンベを使用する経営体は80ほどである。おもにブダイ類を主として漁獲するほかにシャコガイやヤコウガイ、イセエビ類、イカ類なども漁獲対象だ。

販売事業は1階の荷捌き場が産地市場になっていて、毎日7時30分からセリが行われている。こちらは島内消費向けで、約20人の仲買人が参加し、島内の居酒屋や宿泊施設に卸している。市場業務については翌日取材しているので、後述することにしよう。

加工事業はモズクとアーサが対象である。モズクは乾燥品と味付品の2種類で、味付はカツオ出汁をベースに、ニンニク、ショウガ、カツオの3品目を生産している。ニンニクは漁師が好きという理由からだ。アーサは乾燥加工である。なお加工事業にはパートタイマー6名が従事している。

また販売事業の一環としてマグロ集魚灯漁業で獲ったキハダマグロをロインに加工している。底もの一本釣りや潜水漁業の漁獲物は島内で消費されるが、マグロ類の生産量は島

内消費を大きく上回っているのです、島外に出荷するためだ。ロインに加工されたキハダマグロは広島県を中心に中国・関西方面の市場仲買人を対象に航空便で出荷している。仲買人は地元の量販店等に卸しているようだ。

宮古島漁協の昨年の総水揚げ金額は約 3.1 億円で、このうちモズク養殖が 2.0 億円と最も多い。宮古島の漁業は今日、養殖業がメインになっているわけだ。



宮古島漁協の建物（左）、荷川取漁港のポンツーンに係留中のマグロ集魚灯漁船（右）

家畜市場

漁協での取材を終え、国道 370 号線沿いにある「島の駅みやこ」に行く。こちらは国交省が管理する「道の駅」とは異なり、後述する㈱パラダイスプランが経営する民間の施設である。農産物加工品の生産者による直売、宮古そば、総菜品、パン、水などが売られている。ここで鶏飯の握り飯セット（南瓜コロケ、鶏唐揚げが付いた）とパン工房で作られた雪塩入りのクロワッサンを購入する。

続いて県道 78 号に面する J A おきなわの「あたらす市場」（2016 年 12 月にオープン。『あたらす』というのは宮古の方言で『愛おいしい』という意味）で、島とうがらしと宮古島漁協の加工品・アーサ袋詰めを購入した。いわゆる生産者の直売施設であるが、かなり大きくスーパーマーケットのようだ。

県道 78 号線沿いのローカルベース（コテージタイプの宿泊施設）内にあるイタリア料理店で昼食を食べようと思ったがあいにく休みだったので、購入した鶏飯握り飯セットを昼食として食べる。

宮古島はサトウキビと黒牛（肉牛）、そして観光業が 3 大産業になっている。このうち黒牛は「繁殖」がメインである。生産した子牛は毎月セリにかけられるが、その宮古家畜市場が県道から少し入った高台にあった。セリの日以外は誰も来ないから閑散としていた。

肉牛の生産は「繁殖」と「肥育」の分業化が進んでいて、離島は一般に「繁殖」が中心で「肥育」する事例は少ないが、宮古島では J A 宮古肥育センターと後述する大福牧場で「肥育」も行っている。特に J A 宮古では年間 160～200 頭の成牛を出荷している。年間 100 万人の観光客が訪れることから牛肉の消費量も大きく、このことが肥育を成り立たせているのだろう。

島内で消費するためには、一定の設備を備えた屠場が不可欠である。また島外に出荷するにしても、流通コストを考えれば、枝肉として出荷するのが賢明だ。そんな関係から家畜市

場の隣には牛を屠畜する㈱宮古食肉センターが置かれていた。



宮古家畜市場（左）、㈱宮古食肉センター（右）

伝統工芸品センター・宮古上布

食肉センターの先に宮古島市伝統工芸品センターがあった。ここは「宮古上布」と呼ばれる伝統的織物を継承するための養成所と織物の紹介及び関連商品の販売所を兼ねている。施設は宮古市が整備したもので、宮古織物事業協同組合が指定管理者として管理、運営にあっている。

宮古上布は400年余の歴史を有する宮古島の伝統的織物である。下地真栄の妻である稲石いないしが琉球国王に宮古上布を献上したことから王府に知られることになる。宮古島では米が採れなかったので年貢は粟であった。粟は男が納めたもので、女には人頭税として上布の年貢が義務付けられた。

ここで簡単に宮古上布の製造工程を紹介しておこう。苧麻ちよま（地元ではブーという。年に4～5回栽培でき、初夏のものが最も質が高い）というイラクサの一種を栽培し、その表皮を剥いで繊維を取り出し、撚糸を作る。予め布の図案をデザインし、染色しない部分に木綿の糸を括ってから琉球藍などをベースとして染料で染色し（15～16回染色を繰り返す）、反物に織る。織りは早い人でも1日の30cmが精いっぱいらしい。織りあがった布は煮込みや糊付け、砧打ちなどの工程を経て反物になる。手積み、括り、染め、織り、洗濯、ぬき（補修）というこれらの工程が分業化されており、それぞれの専門分野の技能者の手によってつくられてきた。1反を仕上げるのに数ヶ月を要する。

衣類の植物繊維は、今日では木綿が主であるが、木綿が日本で栽培されるようになるのは15世紀末から16世紀中ごろとされており、それ以前は麻、葛、芭蕉、そして宮古上布の原料である苧麻などの植物繊維が活用されていたのであった。

特徴的デザインの宮古上布は風合いがあり、軽くて堅牢な布として知られていた。このため1978（昭和53）年には国の重要無形文化財に指定されている。指定要件は、①すべて苧麻を手紡ぎした糸を使用すること、②縞模様をつける場合は、伝統的な手ゆいによる技法又は手くりによること、③染色は純正植物染であること、④手織りであること、⑤洗濯（仕上げ加工）の場合は、木槌による手打を行い使用する糊は、天然の材料を調整すること、と定められている。

1903（明治36）年に人頭税が廃止されると、宮古の人々は年貢の義務から解放され、宮

古上布は商品として自由に販売されるようになる。明治から昭和期にかけて年間約 1 万反の宮古上布が出荷され、宮古の 3 大特産品となった。しかし和装から洋装へと転換するなか反物の需要は減少していく。1972（昭和 47）年の 1,049 反をピークに減少の一途を辿っており、1980 年代は 300 反前後、1990 年代は 200 反を下回って数 10 反に減少、近年は 10 反前後で推移しており、もはや消滅寸前の状況になっている。生産には手間暇がかかるので現在の 1 反の価格は 200～300 万円である。

展示場の奥は宮古上布づくりの技術を伝承するための養成所になっており、20 台ほどの機織り機が並んでいた。ちょうど昼休みなったので誰もおらず、別の部屋で昼食を摂っていた。写真撮影禁止の貼り紙がしてあったので織機の写真は撮れなかった。

事務所の話では、現在宮古上布を作っている人は 3 人で、この施設で初級の研修を終えた後継者は 10 人ほどだという。ちなみに組合員は 60 人ほどであるが、技術習得をめざしている人はその半分ほどらしい。

センターの裏手に展望台が置かれていた。1994（平成 6）年のウルクアイラウンド関連対策費を使って建てられたものである。しかし伊良部島方面は展望できるが反対側は木が繁って何も見えない。しかも屋根瓦の一部は壊れている。周囲は草ぼうぼうで利用されている形跡は見られない。まさに無駄づかいも甚だしい遺物が醜態を晒している。



宮古市伝統工芸品センターの建物（左）、宮古上布を琉球朝廷に献上した稲石の石碑（右）

航空自衛隊基地

伝統工芸センターの南側、野原地区の小高い丘（標高 110m）の上に航空自衛隊宮古分屯地が置かれている。戦時中は日本軍の第 28 師団の司令部があったところだ。戦後、米軍が接収し、通信部隊が置かれた。その後、航空自衛隊のレーダー基地になった。

尖閣列島周辺のわが国領海に中国海警局の船が頻繁に侵入を繰り返し、緊張が高まっているが、この基地には 2017 年に中国の電波を傍受する F P S レーダーが 2 基配置されている。

近年、中国による尖閣列島への干渉や台湾情勢の変化、あるいは北朝鮮の核保有と相次ぐミサイル発射など、中朝との関係が緊迫するなか、南西諸島の軍事的役割が大きくなっている。このため宮古島へも自衛隊の軍事施設の配置が相ついでいる。

航空自衛隊のレーダー基地の西側、千代田地区には陸上自衛隊の宮古島駐屯地が 2019（平成 31）年 3 月に開庁している。千代田カントリークラブというゴルフ場跡地に整備したも

のだ。前市長の下地敏彦さんはこの土地を巡る汚職事件で起訴された。ゴルフ場の旧経営者から謝礼を得て、自衛隊へ土地を斡旋したという嫌疑である。

この駐屯地は中国や朝鮮半島有事に際し、地对艦誘導弾・地对空誘導弾部隊の配備されているようで、700名の自衛官が駐留しているという。家族を入れると2,000名ほどに及ぶらしい。また駐屯地東部の保良地区には弾薬庫が整備されている。



対中国用の電波傍受施設FPSレーダー（左）、航空自衛隊レーダー基地の正面ゲート（右）

一周道路

航空自衛隊の基地から内陸部の道を通り、旧城辺町にある宮古島地下ダム資料館に向かう。途中、煉瓦づくりの古い煙突が畑の中にポツンと立っていた。古い製糖工場（旧西中共同製糖工場）のものらしい。国の有形文化財に指定されている。1942（昭和17）年に工場が設立されたが、数回操業しただけで旧日本軍に接収されて操業停止となり、戦後も使われることはなかった。

ダム資料館に着いたが、あいにく休館日であった。翌日出直すことにする。

昨日通った国道370号に出て保良の集落を過ぎ、県道83号線に入る。この県道は島の東側の海岸沿いを経て平良港に至ることから島一周道路とも呼ばれている（国道390号と県道83号を合わせて島を一周している）。最初に現れたのは「オーシャンリンクス」というゴルフ場であった。ちょうど島の南東端付近に位置する。

旧城辺町の総合公園を過ぎると、眼下に浦底漁港（第1種）が見えた。宮古島の周囲にはサンゴ礁が発達している。したがって漁港を建設するためにはサンゴ礁を掘削しなければならない。また航路を確保するためには広い範囲のサンゴ礁が犠牲になる。ところが遠目には係留されている漁船は確認できない。復帰後、沖縄県では盛んに漁港がつくられた。1990年代前半はもうひとつおり漁港整備は終わった後だったが、私も水産庁漁港部のOBが作った会社の下請けとして計画づくりに協力したことがあった。しかし浦底漁港のようにあまり利用されていない漁港が他にもたくさんある。漁港の背後にはサトウキビ畑と牧草地が拡がり、道路の崖下には地下水が溜まったと思われる池があった。

続いて海を眺望できる比嘉ロードパークで休む。沖には以前訪ねたことのある大神島が浮んでいた。

道路の内陸部側には耕地が続く。基盤整備促進事業で農地造成や区画整理された実績が地区毎に立看で表示されていた。ほとんどの農地で土地改良が進んでいるようで、今も灌漑

用水の工事を実施中の農地もある。農地のほとんどはサトウキビ畑や牧草地であるが、施設園芸のビニールハウス（マンゴーやパッションフルーツ）、オクラ畑、牛舎などが見られた。遠くには灌漑用水を貯蔵する大きなタンク（ファームポンドと呼ばれている）も建つ。宮古島はまさに「農業の島」なのである。



オーシャンリンクスというゴルフ場（左）、牧草地と牧草ロール（右）

高野漁港

南東端の東平安名岬と北西端の西平安名岬のほぼ中間あたりが高野地区である。地区内には碁盤の目のように整然と家が並ぶ。

高野漁港（第1種）を見に行くと4～5人の漁師がたむろしていた。そのうちの1人は水納島の出身だという。水納島という有人島は沖縄本島の本部町にもあるが、こちらの水納島は宮古島と石垣島の間にある多良間島の北側に位置する島になる。ちなみに5年前に訪れた時には兄弟2世帯が住んでいるだけで、畜産業（肉用牛の繁殖）が営まれていた。

彼は私と同じ74歳になるが、中学1年生の時に水納島から家族と一緒に宮古島に移住してきたという。水納島では戦後のこの時期、農産物は採れず多良間島の農家と芋と魚の物々交換で食いつないだ。百合根も食べたが苦かったそうだ。食べるものがなく魚ばかりの日が続いたこともあったらしい。



高野漁港の斜路に引き揚げられている漁船（左）、水納島からの移住者（右）

水納島から宮古島への移住は、琉球政府の高等弁務官が進めた。水納島から17世帯、そして島尻地区の沖にある大神島からも同じく17世帯がこの高野地区に入植した。入植地では馬で鋤を牽いて開墾したらしい。彼は7人兄弟の二男だったが、この地で分家し、海では

イノー（礁湖）で魚介類を獲り、半農半漁の生活をしてきた。開墾以来 60 年を経過したが、漁港の背後はサトウキビ畑や施設園芸のビニールハウスなどが続き、生活はそれなりに安定しているように見える。

この漁港を利用する組合員は 38 人で、何れも水納島と大神島からの移住者の子孫である。

漁港の斜路には、比較的大きな漁船 1 隻と船外機など 10 隻ほどが引き揚げられていた。一方、港内には 5 隻の漁船と船外機 1 隻が浮んでいた。

港の防波堤では父親に連れられた幼稚園児が小魚を釣っていた。釣りは生まれて初めてだという。

海ぶどう

高野漁港脇の漁港用地には海ぶどうの養殖施設が軒を連ねている。細長いコンクリート水槽の上部に棚をつくり、ここに海ブドウを並べて養殖する方式で、保温のために水槽はビニールハウスの中にある。

海ぶどうは緑藻の「クビレヅタ」のことで、丸い小さな粒々が独特の食感を提供する。クビレヅタは栄養生殖で増えるため、天然の母藻を海から採取して水槽に浮かべて置けば、放っていても成長する。もちろん肥料（栄養塩類）は必要だ。見学した先の男性によると、夏場は 25 日ほど、冬は 2～3 ヶ月ほどで出荷できるという。

宮古島で最初に海ぶどうの養殖を始めたのが、この漁港用地で養殖業を営む「高野海ぶどう生産組合」である。創業は 2005 年ごろで、当初 8 経営体でスタートした。その後、2 経営体が廃業し、現在は 6 経営体に減っている。経営体の中に高野地区在住の人はおらず、全員が平良方面から通勤しているようだ。

生産組合といっても、各養殖施設や作業小屋などはそれぞれの経営体が独自に整備しているようで、また生産物の販売も個別に対応している。つまり生産組合方式を採用しているのは、宮古島市の漁港用地を借用し、取水施設を共同利用するためだろう。

一番奥の施設では男女 2 人が海ぶどうの選別と出荷作業を行っていた。男性の方は 40 歳で静岡から来たという。彼に養殖施設内を案内してもらった。温室内は 50℃を超えるのではないかと思えるほど暑かった。海水温も 30℃近くなるだろう。



海ぶどうを養殖する陸上水槽（左）、海ぶどうの選別作業をする人（右）

宮古島では高野地区の他に、島南部の旧上野村に「博愛海ぶどう生産組合」があったが現在はやっているかどうか分からない。一方、島の北西部の狩俣では 2020（令和 2）年 3 月

に「かりまたグリーンキャピア協同組合」（会員5名）が組織され、海ぶどうの養殖を始まっている。

クルマエビ養殖場

高野漁港の奥まったところに宮古島漁協が自営事業で取り組むクルマエビ養殖場がある。海岸に防波堤を築いてその内側を養殖場とする築堤式だ。養殖池は3面に分かれていて総面積は約14,000㎡に及ぶ。

1993（平成5）年から漁協の自営事業でクルマエビ養殖を始めたが、昨年（2021年）11月に急性ウイルス血症（PAV）に感染し、約140万尾が全滅した。実は2016年から疾病が見つかったが、全滅したのは昨年初めてであったという。通常、クルマエビの養殖場では出荷を終えた夏場に池を干上げて石灰を撒き、日光消毒するが、この養殖場は池が水漏れしており、夏場に池を干出させることができなくなっただけでなく、現状のまま養殖を続ければ同じ過ちを繰り返すことになるため、漏水箇所を見つけ補修し、池を干上げる作業が実施できるようになる2024年まで生産を中止することになったものだ。

宮古島漁協のクルマエビ種苗は久米島の海洋深層水を使用した種苗センターから導入したもので、同センターは「ウイルスフリー」を売りにしていたにもかかわらず、感染が広がっていることは環境中に病気の原因になったウイルスが存在していたことを示している。

漁協のクルマエビ養殖生産は、多い時には30トン、約1億円を生産していた。しかし4年間は収入がゼロになる。事業所長を含め5人体制であったが職員はそのまま雇用しつづけることになるため、漁協経営にとっては大きな痛手になるだろう。

クルマエビ養殖は戦後、瀬戸内海の山口県からスタートし、その後、熊本県、鹿児島県へと主産地が移動、現在は沖縄県が日本一の生産県となっている。水温が温かく、クルマエビの成長が早いという有利な条件を有していたからだ。このため県内各地の漁協では補助金を活用して養殖施設をつくり、養殖を進めてきたが、八重山漁協のように多額の借金を抱え生産を断念するところも出てきた。宮古島漁協もこの例に当てはまるわけであり、計画通り再建されることを願うばかりだ。

海養殖場の入口にはバリケードが設けられ、立入禁止の標識が掲げられていた。誰もいなかったので敷地内に入り、養殖場の写真を撮った。満潮時だったのかもしれないが、海水が養殖池の上まで覆っていた。



クルマエビ養殖場の管理事務所（左）、生産を中断している養殖場（右）

大福牧場と畜産業

県道 83 号から真謝漁港（第 1 種）へ折れる手前の右側に牧草地が広がっていた。道路を挟んで左側には牛舎が並び、入口に「大福牧場」と書かれた看板が立っていた。

市役所の畜産課で、宮古島で肉牛の肥育をしている生産者は大福牧場と J A 宮古の肥育センターと聞いていたので、偶然その牧場を目の前にすることになったのだ。島から帰って調べてみると、この牧場は正確には農事法人ピンフといい、宮古島出身の大手ゼネコン・㈱大^{だいよね}米建設の関連法人となっている。

入口でうろうろしていると、これまた偶然、経営者の方が軽自動車に戻って来られ、手短かに話を聞くことができた。大福牧場では以前、肥育も大規模に行っており、黒牛を生きのまま船で大阪方面に送っていたようだ。しかし長距離の輸送でコストがかかるため経営的に合わなくなり、現在は子牛の繁殖生産を中心としていて、年間 100 頭ほどを上述した家畜市場のセリ市に出荷しているとのことだ。後述するように宮古島の子牛の年間出荷数は約 1,000 頭なので、その 1 割を占める宮古島最大の子牛生産者ということになる。

肥育の方は島内消費を対象に月に 1 頭程度出荷しているとのこと。J A の方は月に 10～20 頭ほどを出荷しているから、今では J A が肥育牛生産のメインとなっている。肥育牛の屠殺処理は上述した食肉センターで行われ、主として島を訪れる観光客向けに販売されている。大福牧場の場合は、「大福牛」のブランドで、宮古島のホテルアトールエメラルド内のレストラン「ラウンジカーレント」に提供している。ちなみにこのホテルは㈱大^{だいよね}米建設の関連企業である。

入口の左右に 6 棟ほどの牛舎が並び、おそらく 200 頭ほどの黒牛が飼われているのだろう。残念ながら写真撮影は断られた。後でわかったことだが、この大福牧場の土地は陸上自衛隊の駐屯地の候補にもなった場所だったのでいろんな関係者がやってきて迷惑していたにちがいない。なお、地権者は防衛省による買収に反対していたし、当時の下地市長も地下水汚染の恐れがあるためこの用地は断念している。



大福牧場の牧草地（左）、別の繁殖農家の子牛（右）

牛の餌は牧場で生産する牧草が基本であるが、子牛や親牛にも一時期濃厚飼料を与えるため、島の牧草地の餌だけでまかなうことはできない。このため、濃厚飼料を中心に餌料を購入しているが、このところの円安で輸入濃厚飼料の価格が 1.7 倍ほどに高騰している。一方、コロナ禍で和牛肉の消費が落ち込み、販売価格が下落している。肥育農家は購入する子牛の価格を抑え始めたことから現在のセリ値は 1 頭あたり 40～50 万円に下落している。つ

まり経費の増大と販売価格の下落で経営は厳しくなっているというのだ。

宮古島では、2020年時点で、633戸の農家が肉用牛を飼養しており、年間972頭の子牛を出荷した。1戸あたりの平均出荷頭数は15頭になるが、大福牧場がこのうちの100頭を出荷しているため、実際の平均出荷数は13~14頭ということになるだろう。この年の子牛の平均価格は65万円/頭だったから生産額は26億円ほどと推定される。つまり肉用牛の生産額はサトウキビに次ぐ宮古島の重要な産業になっているわけだ。

なお、宮古島の畜産業は、2020年度時点で肉用牛の他に、馬（10戸、58頭）、豚（7戸、477頭）、ヤギ（100戸、704頭）、採卵用鶏（16戸、26,482羽）が飼われている。

雪塩ミュージアム

引き続き県道83号を北上し、真謝漁港を見に行く。港内に漁船が1隻係留されているだけ、斜路に7隻の漁船と船外機が引き揚げられていた。近くで若い2人の漁師がモズクの種付けの準備をしていた。港の入口にはモズク麺を食べさせる「んつばた」という店があった。この地区では2経営体がモズク養殖を営むそうだ。

83号線に戻って北上、国立療養所宮古南静園内にあるハンセン病歴史資料館に行くが、16時で閉館しており、翌日訪問することにした。

さらに北上して島尻の集落を過ぎる。以前、島尻漁港から大神島にでかけたことがあった。集落の外れに小さな入江にあり、はたらず橋からマングローブを眺めた。その先に築堤式の大きなクルマエビの養殖場があった。(有)あさひ養殖部と入口に書かれていたので民営である。関係者以外立ち入り禁止と書いてあったので、障害のない場所から写真を撮った。こちらの養殖場では疾病は発生していないのだろう。

次の集落が狩俣で、ここを過ぎると池間島を結ぶ池間大橋になる。大橋の手前を左折し、狩俣漁港（第1種）に降りていくと「雪塩ミュージアム」があった。

雪塩ミュージアムは、「雪塩」と銘うった特殊な塩で製造する工場、雪塩を紹介するとともに関連商品を販売する場所になっている。特殊な塩の製造工程はつぎのようなものだ。

サンゴ礁に井戸を掘って地下海水を取水し（プランクトン等の懸濁物が除去される）、逆浸透膜（RO膜）を使って濃縮海水を作り、この濃縮海水を加熱した金属プレートに吹き付けることによって水分を瞬時（約2秒）に蒸発させて作った塩で、粉のような性状から「雪塩」と命名したようだ。RO膜は本来、海水淡水化に使われており、濃縮海水は捨てて、淡水を得ることが目的であるのに対し、ここでは逆に濃縮海水を得ることが目的で副産物の淡水は清掃や散水用として捨てられている。

通常の塩は濃縮海水を煮詰めて塩の結晶を得て、にがり成分を分離するが、「雪塩」はにがり成分をそのまま含んでいる点に特徴がある。したがって「にがり」を構成するMg、Ca、Kなどの成分が通常の塩に比べて圧倒的に多い。なお出来上がった塩は粉状なので扱いづらいため製品は顆粒状に加工されている。そしてこの塩を使った関連商品がたくさん作られている。

17時前にミュージアムに到着すると、ちょうど30人ほどの観光客が観光バスに乗せられて到着したところであった。ほとんどが60歳以上の高齢者であった。たぶんツアーの観光コースに組み込まれているのだろう。一行は先ず「雪塩」を加えたソフトクリームを御馳走

になり、ガイドからパネルやビデオを使って「雪塩」の説明を受けた後、隣のショップで関連商品を買うことになる。ほとんどの人が土産物として買っていたから1台の観光バスで10万円近い売り上げは確実だろう。私も雪塩と菓子を試しに購入した。

ミュージアムは地元の㈱パラダイスプランが経営している。ミュージアムの女性の話では、この製造プラントは大手電機機器メーカーのオムロン㈱(旧立石電機)から引き継いだという。真偽のほどをネットで調べたがわからなかった。おそらく濃縮海水を瞬時に固体化する点にノウハウないし特許があるのだろう。パラダイスプランはこの塩の製造に加えて、菓子製造、水の販売、島の駅みやこなどを複合経営しており、少し古いデータになるが、2018年度の売上は約26億円だった。



雪塩ミュージアムの入口(左)、ガイドから雪塩の説明を受ける観光客(右)

モズク養殖

雪塩ミュージアムから海岸に沿って西に100mほど進むと狩俣漁港(第1種)がある。

上述したように宮古島では60経営体がモズク養殖を営んでいるが、そのうちの半数にあたる30経営体がこの狩俣地区の漁業者なのだ。池間大橋に向かう細長い岬と西平安名崎に向かう岬の間は約50haほどの遠浅なリーフが広がっているが、ここがモズク養殖の漁場となっている。東西を半島で囲われ、さらに北側に池間島が横たわることから抜群の静穏度が保たれている。まさにモズク養殖の最適地といえる。

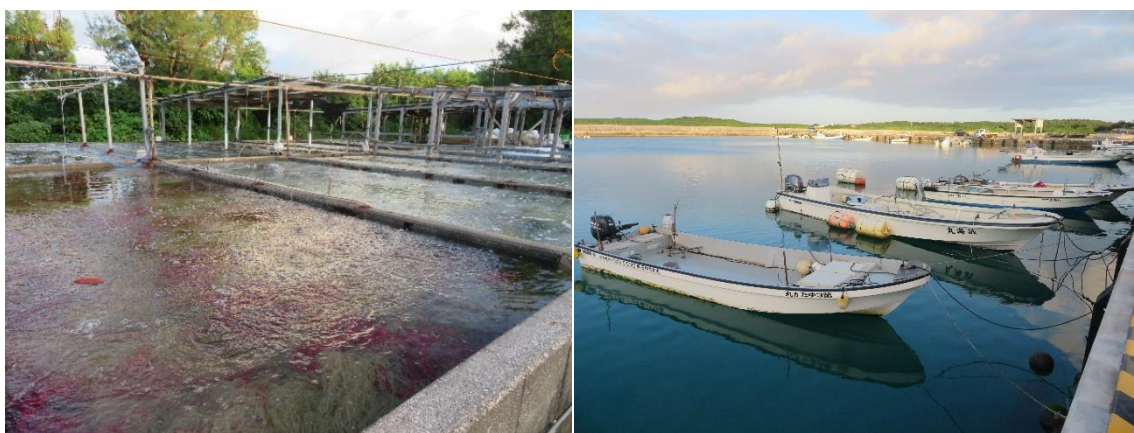
宮古島のモズク養殖の生産額は年間2億円を超える。今や宮古島の水産業の重要な収入源になっており、1経営体当たりの平均粗収入は350万円ほどになる。

漁港の裏にはたくさんのコンクリート水槽が並び、ちょうどモズクの種付け時期を迎えていた。水槽内には海苔網が沈められ、採苗作業が行われていた。このように自前で種付け用の水槽を保有するのはこの狩俣地区の他に平良の市街地に近い久松地区の2地区である。それ以外の地区のモズク養殖業者は市の海業センターの水槽などを借りて、種付けをしている。

狩俣漁港の港内には13隻の船外機が、斜路に約10隻の漁船陸揚げされていた。モズク養殖は船外機で十分用が足りるので、この漁港の漁業者はほとんどがモズク養殖を営んでいるものと考えられる。

陽が傾いてきたので、県道230号線を南下して県道83号に入り、平良の中心市街地にあるホテルニュー丸勝に入った。このホテルには大浴場がある。大浴場に入浴後、近くの居酒

屋（焼肉 589）に出かけて夕食を食べた。



モズクの種類付け中の水槽（左）、狩俣漁港の船外機船（右）

令和4年11月29日

魚市場

朝早くから前日のヒアリングメモを作成し、7時前にホテルを出て魚市場に行った。魚市場は宮古島漁協1階の荷捌場である。7時すぎにはこの日のセリにかけられる魚介類がセリ場に並んでいた。仲買人は20人ほどおり、徐々に集まってきて品定めをしている。この日に出荷した漁業者は19人であった。魚種は30種以上あり、パヤオで釣ってきたキハダマグロ、底もの一本釣りで獲られたアカマチ、ミーバイ、サンゴ礁内で潜水によってとられたブダイ類、アイゴ、イセエビ、タコなどがプラスチック製のトロ箱に並べられている。このトロ箱の山毎に入札が行われる。

この日の入荷量は通常よりも少ない方に相当し、多い時には荷捌場のフロアーがいっぱいになるほど並ぶらしい。

新月に近く電灯マグロ釣りの船は出漁していたので、パヤオで獲ってきたキハダマグロが並んでいた。電灯マグロが入港すると値段が下がるため、パヤオで獲れた比較的小さいキハダマグロ（20 kg以下）は競争を避けて、電灯マグロが入荷されない日に出荷される傾向が強いらしい。キハダマグロの中には肉を丸く食べられている個体が見られた。これはダルマザメというサメに食べられたものらしい。同じような被害を受けた例は父島のカジキで見たことがあった。

入札作業は、漁協職員のセリ人、落札者の札を魚に置く係、記録係の3人体制で実施される。トロ箱単位で入札が行われ、マグロ類などの大物は1尾単位になる。買受人は小さな板に白墨でkgあたりの入札価格を書き、高い価格を提示した買人が落札する。ただちに落札者の屋号を書いた紙が魚に張られていく。

入札は18分で終わった。魚種別生産者別の落札価格は入札終了後、市場の黒板に掲示される。この日の最高値は、魚類ではアカジンの2,100円/kg、甲殻類ではイセエビの4,100円/kgであった。宮古島の3大高級魚はアカジン、アカマチ、アマクサ（タマンの一種で高級魚）と言われており、アカジンは予想通り最高値で、アカマチの最高値は1,900円/kgでこれに次いだ。なお、アマクサの水揚はなかった。

入札が終わると、各仲買人は落札した魚介類を軽自動車に積み始めた。宮古島は人口が3

万人を超え、また観光客も多いことから島内需要は大きい。仲買人は専ら島内に供給しており、出荷仲買はいない。仲買人の販売先は居酒屋とスーパーが中心である。積み込みを終えた業者はすぐに店に戻っていった。



床に並べられた魚介類（左）、セリの風景（右）

うえのドイツ村

魚市場からホテルに戻り、旅支度をしてから出発。この日の午前中は島の南海岸を周ることにした。国道沿いの「シロクマカフェ」という店でモーニングの朝食を食べる。国道 390 号を走り、途中のファミリーマートで新聞、飲料、サインペンを購入する。ちなみに宮古島のコンビニはファミリーマートのみである。セブンイレブンもローソンもない。

すぐに国道を右折して県道 235 号に入った。途中に南瓜畑があったがすでに花を咲かせていた。南瓜の蔓が伸びる 5 m ほどの幅の両側には、風よけ、害虫対策、土壌改良等の複合効果を兼ねてソルゴーが植えられている。

島の南西から南海岸一帯は旧下地町になる。この海岸沿いは宮古島のリゾートエリアに相当するが、最初に現れたのが宮古島東急ホテル&リゾートであった。ホテルに隣接してエメラルドコーストゴルフクラブのコースが海沿いに続いている。その先に文字通り入江湾と呼ぶ深い入り江があり橋が架かっていた。ちょうど張潮時にあたり、海から勢いよく海水が流れ込んでいた。橋を渡った先が旧上野村になる。

上野村に入ると道路端にゴーヤのハウス栽培施設があった。ゴーヤの蔓を天井に誘導し、枝分かれした蔓を天井の針金に伸ばし、吊り下がったゴーヤを収穫する仕組みだ。

県道 235 号は宮古島の南海岸を走るが、道路の陸側に「アパラギシーサイドヒルズ」という別荘地が続く。まだ家はほとんど建っていない。インターネットで調べると、宮古島に本社があるユニマツ南西不動産（後述するユニマツグループの系列企業）という会社が分譲しているようだ。総区画数は 154 区画で、1 区画の面積は 100~200 坪である。価格は 1 区画 2,000 万円近くする。別荘地を過ぎると、「うえのドイツ村」が現れた。敷地内に入るのは無料だが、建物の一部は入館料をとる。車を道路脇に停めて中に入った。観光客はほとんどいない。上野村にドイツ村ができた経緯は次のようなものだ。

1873（明治 6）年、ドイツの商船 R. J ロベルトソン号は中国の福州からオーストラリア・アデレードに向けて出航したが、航行中に台風に遭遇し乗組員 2 人が波にのまれ、マストと 2 隻のボートを失って大海原をさまようことになった。そして 7 月 11 日、宮国地区（ドイ

ツ村が置かれている地区)の沖の大平瀬に座礁した。宮国地区の住民はクリ舟を漕ぎだして救助にあたった。救助された乗組員は34日間にわたり、手厚く看護され、無事本国に戻ることができたのである。

帰国後、ロベルトソン号の船長、エドゥアルド・ルドヴィヒ・ヘルンツハイムが事の経緯を新聞に発表し、それを読んだドイツ皇帝ヴィルヘルム1世は、宮古島の人々の博愛精神に感動し、3年後の1876年(明治9年)に軍艦チクロープ号を日本へ派遣した。チクロープ号は横浜に入港後、日本政府を通して宮古島に来島し、漲水港(現在の平良港)を見渡せる位置に博愛精神を賞賛する記念碑を設置し、石碑の除幕式と贈呈が行われたのである。

しかし、このことはその後忘れ去られ、記念碑の探索を趣味としていた松岡益雄さんが1929(昭和4)年にこの記念碑を見つけたことにより、宮古島の人々によるドイツ商船救助が世に知られることになった。彼は沖縄県教育会に働きかけ、宮古郡教育部会でも顧問所や老人からの聞き取り調査を行った。1933(昭和8)年に文部省は教科書に載せる「知らせたい美しい話」を募集した。このドイツ船救助の話「博愛」と題して応募したところ一等に選ばれ、1937(昭和12)年に小学校の修身教科書に掲載されることになる。これを契機に美談として全国に広く知られることになったというわけだ。そして建碑60年後の1936(昭和11)年には、宮古郡教育部会や外務省、日独親善団体の協力で遭難現場であるンナト浜に当時の近衛文麿総理大臣直筆の「独逸(ドイツ)商船遭難の地」の碑が建てられた。

この故事は日独防共協定(1936年)に向けた戦意高揚の側面もあるが、旧上野村はこの故事を観光資源として地域振興に活用したいと考えたのであろう。1996(平成4)年に中世のドイツのお城を再現(博愛記念館)、キンダーハウス、ホテルや水中観光船、運河も整備した。おそらく長崎県のハウステンボスをイメージしたのだろう。ちなみに2000(平成12)年にはドイツのシュレーダー首相もここを訪れており、それを記念する石碑も建っている。

このドイツ村は2012年から後述する(株)南西楽園リゾートが指定管理者になっている。



うえのドイツ文化村の入口(左)、博愛記念館(右)

シギラセブンマイルリゾート

「うえのドイツ村」から東側の海岸沿いはシギラセブンマイルリゾートと呼ばれる一大リゾート地帯となっている。シラギビーチを中心としたセブンマイル(約11km)の範囲で、旧上野村の海岸線を全てカバーし、隣接する旧下地町、旧城辺町にもかかる。

このリゾート地帯には、ホテル9、レストラン23店、天然温泉、プール、ゴルフ場、ピ

一ち、水中観光船、オーシャンスカイという展望リフトなどがあり、その面積は約 400ha に及ぶ。まさに宮古島を代表するリゾート地帯で、宮古島観光の中心となっている。

宮古島の観光入込客数は近年急増しており、コロナ禍前の 2019（令和元）年度には 100 万人を超え、石垣島とほぼ並んでいる。2009（平成 21）年度は 34 万人だったから、この 10 年で 3 倍に増えたことになる。観光客の増加に大きく貢献したのが、このシギラセブンマイルリゾートなのだ。

この巨大なリゾート事業を展開するのが、「うへのドイツ村」の指定管理者にもなっている（株）南西楽園リゾートである。地元宮古島市に本社を置いているが、親会社はユニマットグループといい、こちらは東京に本社がある。そしてシギラリゾート開発の仕掛け人が同グループの総師である高橋洋二氏（78 歳）だ。同氏は 2011 年正月の地元紙のインタビューに応じて、リゾート開発の経緯を語っているので紹介しておこう。

高橋氏が宮古島に始めてきたのは 1987（昭和 65）年で、43 歳の時だった。すでに消費者金融や自動販売機事業で成功を収め、ざわついた仕事から一步身を引いて、自分を見つめなおそうと思っていたのかもしれない。

「上野村にきてみるとここはすごいと思った。原生林だったが、南に向かってよいリーフが広がっている。しかし、開発しようという考えはなかった。当時、シギラのビーチは砂もないようながたがたの状況だったが、その中にバンガローがあり、周囲には誰もいない。夜になると電気一つもないが、住むことになった。1 年間住むうちに、周囲の人たちが『東急リゾートみたいにゴルフ場やリゾートホテルをつくってくれないか』と持ちかけてきた。そこまでの時間と資金に余裕がなく、プライベートで楽しめる空間があればそれで良いとの考えだったので断っていた。しかし、周囲の熱心さに打たれて、だんだんとそういう気になってきた。しばらくすると『高橋は土地ころがしをやっている』という噂があり、これは何か一つつくらないと、ここに情熱を持って取り組むということを表明できないと思った」とリゾート開発の動機を語っている。



シギラセブンマイルリゾートのコンドミニウムとホテル（左）、展望リフト（右）

最初に建設したのが「うへのドイツ村」に隣接するホテルブリーズベイマリーナで、用地買収と許認可で 7 年の歳月を要し、1993（平成 5）年にオープンしている。それから丸 30 年、3 年ずつのステージで段階的に整備が続けられ、今日の広大なリゾート地になった。

（株）南西楽園リゾートの従業員数は約 750 人（パートなどを含めると 2,000 人ほどになるようだ）、昨年度の売上高は 91 億円であった。2015 年国勢調査時の宿泊業、飲食サービス

業の就業者数は 1,848 人であったから西南楽園リゾート関連が約 4 割を占め、島の雇用機会の創出に多大な貢献をしている。また売上高は農業生産額に迫る。

井戸と鍾乳洞

シギラセブンマイルリゾートの東のはずれに、イムギャーマリンガーデンという小さな入江がある。ここは外海に較べると静穏なので、シュノーケリングやカヌーなどのレクリエーション活動には都合がいい。また風光明媚なことから観光地にもなっているようだ。近くには数台の観光バスが停まり、湾内ではカヌーの講習会が行われていた。

この近くに「友利のあま井」とよばれる大きな水汲み場（井戸）がある。場所と行き方が分からないので、観光バスのガイドや近くにいた人に道を訪ねたが誰も知らなかった。遊ぶ場所はわかっても、島の人々の暮らしに関わる歴史的遺産にはほとんど興味がないのかもしれない。

上述したように宮古島は隆起サンゴ礁の島で、大地の大部分が石灰岩で覆われている。このため、雨水は石灰岩層を浸透し、地下水として貯蔵される。この地下水が自然に湧き出る場所が「ガー」と呼ばれる水場、すなわち井戸であった。水道が普及する 1960 年代までは島民の命を支える場所だったのである。

島内にはこの「ガー」がたくさんあるが、このうち旧城辺町のこの近くに「金志川泉」と「友利のあま井」という 2 つの「ガー」がある。海から内陸部に入り、地元の人に道を聞くとすぐに分かった。曲がりくねった細い道を進み、最初に「金志川泉」を訪ねた。

金志川泉は集落から少し下がったところにあった。市の史跡に指定されているので看板が立っていた。洞窟の階段を 30 段ほど下ったところにほぼ円形の水壺があるらしい。ただ真っ暗だし足場も悪いので降りていくのはやめた。海に近いので潮位によって海水が混ざるため後年は飲用にされていなかったという。

「友利のあま井」は「金志川泉」から山道を登った先にあった。こちらははるかに規模が大きい。自然洞窟の井戸で、深さは約 20m ある。地下に向かって石段が整備されている。1965（昭和 40）年に上水道が普及するまでこの井戸水が人々の生活を支えていた。ちなみにこの井戸は沖縄県の有形民俗文化財に指定されている。

蛇口をひねれば容易に水が得られるようになったのはせいぜいこの半世紀ほどの間のことである。水汲みは女性の仕事だった。20m の深い階段を重い水を担いで登るのは大変な重労働であったに違いない。

石灰岩からなる宮古島は当然のことながら鍾乳洞がある。「友利のあま井」から再び海岸沿いの道路に出て、東に向けて走ると、仲原鍾乳洞の道標が出ていた。台地上に登るとサトウキビ畑が続き、仲原地下ダム工場の現場に出くわした。さらに内陸部に入ったところに仲原鍾乳洞があった。

この鍾乳洞はサトウキビ畑の私有地にあり、したがって民営である。粗末な小屋に入って 500 円の入場料を支払い、他の入場者と一緒に鍾乳洞の説明を受ける。管理人は冗談でサトウキビ畑の上でぴょんぴょん跳ねると鍾乳洞の天井が抜けると話していたが、長い年月の間には本当に抜けるかもしれない。というのも鍾乳洞の入口は石灰岩が溶けてできた穴だったからだ。

シルクホール（ドリーネ）と呼ばれる地下の空洞が陥没してできた穴の脇に階段が作られていて、15mほど降りた先が鍾乳洞の入口にあたる。陥没穴の上部から光が差し込み、地表には様々な植物が生えていた。そこから横に進んだ先が鍾乳洞になる。鍾乳洞の長さは約100mで、通路にはシートが敷かれ、照明も整備されている。鍾乳洞の中には一升瓶がごろごろしていた。おそらく泡盛を詰めた一升瓶で、鍾乳洞で「古酒」を熟成させているのだろう。ちなみにこの鍾乳洞は現管理人の5～6代前からその存在が知られていたようだ。



「友利のあま井」の水汲み場（左）、仲原鍾乳洞の内部（右）

地下ダム資料館

仲原鍾乳洞からサトウキビ畑の中を東に向けて走り、地下ダム資料館に行った。昨日は休館日だったので、改めて出向いたのである。資料館に隣接して宮古水利用中央管理所、公園、水位水質監視施設が置かれている。入館料は330円であった。

宮古島は隆起サンゴ礁の島で、石灰岩層の下に水を通さない泥岩層があることはすでに述べた。雨水は石灰岩層を浸透し、泥岩層に遮られて地下水が形成される。石灰岩は10%まで貯水されるが、飽和状態になると、標高の低いところに流れ、やがて海に達する。地殻変動による断層によって地下の泥岩層は山脈を作り、山脈の間に帯水層が形成されている。この帯水層に止水壁をつくることによって地下水を貯めるのが地下ダムの原理である。ドリルで石灰岩に穴をあけ、そこにコンクリートを流し込む。鉄は水と反応して腐食するので、一切使われていない。地下水が満水になると地表は水浸しになるため止水壁の上部に地下水が流出できるように越流する仕組みがつくられている。

宮古島では、1974（昭和49）年に地下ダム建設のための地質調査が開始され、1977（昭和52）年10月にダム建設に着工、1979（昭和54）年3月に皆福地下ダムが竣工した。そして1993（平成5）年に地下水による畑地の灌漑が開始された。その後、砂川地下ダム（1993年止水壁締切）、福里地下ダム（1996年止水壁締切）が相ついで完成、現在は4つ目となる仲原地下ダムの工事が進められている。

地下ダムに貯えられた地下水はファームポンド（大きいものではφ65m、高さ13.2m）と呼ばれる大きなタンクにポンプアップされ、灌漑用水路を通じて島内の農地に供給されている。このファームポンドが全島に7つ整備されている。

なお地下水は上水道の水源にもなっているので、流域は保全地域に指定され、地下水を汚染する恐れのある事業や施設（ゴルフ場、観光農園、鉱業、クリーニング業、畜産業、産廃

処理業、大量の水を使用する事業、自動車解体業、燃料備蓄施設など）は禁止されている。



地下ダム資料館（左）、皆福地下ダムの水位水質監視施設（右）

宮古市総合博物館

地下ダム資料館を見学してから内陸部の道路を通り、宮古空港に出た。空港の近くには5,000人収容可能なドーム型のスポーツ観光交流拠点施設「JTAドーム宮古島」があった。JALのマークが付いているところを見ると、日本航空がスポンサーになっているのかもしれない。

空港正面を右折し、宮古市総合博物館に向かう。この博物館は1979（昭和54）年に平良市の歴史民俗資料館として開館、その後、自然史資料を加えて1989（平成元）年に平良市総合博物館となり、市町村合併後、宮古島市に引き継がれたようだ。入館料は大人330円（税込）だが、70歳以上の高齢者は無料である。

建物は平屋建てで、中央ホールを挟んで展示室が左右に分かれている。向かって右側が第1展示室で、歴史民俗関係の資料が展示されている。ここには先史時代から戦前にかけての島の歴史を学ぶことができる。上野字豊原で発見された26,000年前のピンザアブ洞人の骨が展示されていたが、国内では3番目に古い人の骨とのことだ。民俗部門ではカヤヤーという古い茅葺きの家や、漁撈、農耕、信仰、民俗行事などが紹介されている。リーフ内では「魚垣」と呼ぶ垣漁も行われていたようだ。

左側の第2展示室は自然と美術工芸関係の資料が展示されている。自然コーナーでは、島の海生生物、鳥類、植物、昆虫、蝶、石などの標本や写真が展示されている。島の特徴的な渡り鳥であるサシバ、アカハラダカが詳しく展示されていた。美術工芸品は、書、焼き物、宮古上布などが展示され、地下ダムについての解説もある。

この他に鯨の化石、宮古馬や鹿の骨格標本、馬は剥製なども展示されていたが、どうも系統だっていない。

コロナ前の入館者は年間約2万人で、その



宮古市総合博物館の正面玄関

うち児童・生徒が約5千人であった。一方、団体客は約1,000人と少ない。しかしコロナ禍に入ってから児童・生徒を中心に激減している。

博物館には12時57分までいて、再びローカルベースにあるイタリア料理店を訪ねたが、この日も休みだった。途中のスパイスドラゴンという中華料理店で麻婆茄子定食を食べる。

その他の農業

総合博物館を出ると、サツマイモの畑が広がっていた。本州では、サツマイモは花を咲かすことはないが、気温が高い宮古島ではアサガオのような紫色の花を付けていた。水田が殆どなかった宮古島では粟とサツマイモを作り、粟は年貢として納めたからサツマイモがまさに島の人々の主食であった。

現在の宮古島の農業の主産品はサトウキビと葉タバコ、そして近年生産量が拡大しつつある野菜類と果樹類である。ここで宮古島のサトウキビを除く農業生産の動向を整理しておこう。

葉タバコの年間生産額は20億円前後で推移し、サトウキビと並ぶ重要な栽培種であった。しかし近年は下降線を辿っており、2021年は経営体数が94に、生産額は17.5億円ほどに縮小していた。たばこの需要が近年漸減していることから、JT（日本たばこ）は契約栽培の農家数を大幅に減らしてきたわけだ。

訪問時はちょうど葉タバコの苗づくりの時期に当たっており、島に滞在中、今年の葉タバコに関する新聞記事が地元紙に出ていた。報道によると、今年度の契約農家数は61戸で契約面積は244.5haであるという。前年の2021年が378.3haだったので、今年は約2/3に縮小することになった。このため生産額は10億円前後になると見込まれる。なお、地区別の契約農家数と契約面積は次の通りである。

平良地区：18ha（5戸）、城辺地区：78.6ha（17戸）、下地地区：70.6ha（19戸）、上野地区：77.3ha（20戸）。

市役所の農政課でのヒアリング調査によると、葉タバコの共同乾燥施設は市内に5ヶ所に整備され、乾燥はコンピュータ管理で行われているという。ちょうど葉タバコの端境期であったため、葉タバコの畑も乾燥作業も見ることができなかった。



南瓜の露地栽培（左）、ニガウリの温室栽培（右）

葉タバコを除く宮古島の野菜と果樹の2020年の販売額（JA取扱分に限定）は約7.1億円であった。最も多いのがニガウリの3.5億円、これに冬瓜（1.1億円）、オクラ（0.8億

円)、インゲン (0.7 億円)、南瓜 (0.5 億円) と続く。

この時期のニガウリは上述したようにハウスで作られており、高さ 1.8m ほどの位置に蔓が巻くネットが設置されていて収穫に便利なようにつくられていた。オクラは露地栽培であったが、すでに収穫終期にあっていた。冬瓜やインゲンはこれから種蒔が始まる。南瓜畑の両側は上述したようにソルゴーが植えられていた。

果樹ではマンゴーの温室栽培が目立ったが、この他にもメロン、パパイヤが出荷されている。しかし果樹は J A を通さないケースが多いと思われ、生産実態はわからない。

大野山林

市立総合博物館と熱帯植物園の裏側は大野山林と呼ばれ、宮古島では数少なくなった原生林の森である。宮古島の森林面積の割合は島の 14% と言われているから、残り少ない貴重な原生林なのだ。アカギやリュウキュウマツ、タブノキが繁り、極相林を形成している。この森には野鳥や昆虫類など生息、豊かな生物多様性が維持され、島で唯一ともいえる生態系が残る。

この山林内を道路が走っている。途中、水が湧き出ていると思われる場所があり、宮古島には珍しい沢水のような流れを形成している。その周囲には樹皮が赤いアカギが優占していた。このアカギは小笠原諸島の父島や母島にも分布しているが、じつは小笠原のアカギは薪炭材として移植された移入種であった。このため、環境省はこのアカギの駆除に躍起になっている。

大野山林の南隣に高野地区の開墾地がある。上述したように高野地区は水納島と大神島の移住者が開墾した土地だ。戦後、彼らが入植した当時は大野山林が続いていたのかと想起すると、開墾に要した苦労がうかがえる。



アカギが優占する大野山林 (左)、地下からの湧水が沢水になって流れる (右)

国立宮古南静園

県道 83 号の最北端から少し北上した海側にハンセン病患者を隔離していた国立宮古南静園がある。昨日も来たのだが、資料館が閉館した後だったので、再び訪れた。この施設は 1931 (昭和 6) 年 3 月に県立宮古保養院と命名されて開園した。

国は、1907 (明治 40) 年に「癩予防ニ関スル件」に基づき「らい病」患者を隔離収容することを決定、全国を 5 つの地域に分け、らい療養所を設置することになった。九州地域には

第五区九州らい療養所（熊本県）が発足した。一方、沖縄県は県内に単独に設置することが国の方針であった。しかし県は反対運動が起きたため設置を断念する。このため沖縄県は1910（明治 43）年に第5区に加入、患者は九州療養所に送られることになったのである。しかし、遠方であったこともありなかなか患者の隔離が進まないことから、1927（昭和 2）年に沖縄県は第5区から脱退する。内務省は改めて沖縄県内での分散設置の方針を立て1928（昭和 3）年に沖縄本島の名護と宮古島を選定した。そして、宮古地方のハンセン病患者をこの施設に収容したのであった。

開院当初の収容定員は 40 人で、最初は 15 人の収容から始まったようだ。1933（昭和 8）年に臨時国立らい療養所「宮古療養所」となり、1941（昭和 16）年に「国立療養所宮古南静園」と改称される。全国 13 療養所のなかでは最も南に位置する。

療養所は門から 10mほど下がった海岸沿いにつくられている。東側が海に面し、周囲は山林で囲まれており、付近に人家はない（ちなみに香川県の大島清松園の場合は人家が同じ島の中にあつた）。ここにはピーク時 400 人のハンセン病患者が収容されていた。しかし新たなハンセン病患者の発生はほとんどないことや隔離政策をやめたことから、現在の入所者は 38 人に過ぎない。そして何れも高齢化しており、平成 4 年 7 月 1 日現在の平均年齢は 89.8 歳である（男の最高齢は 95 歳、女の最高齢は 102 歳）。

所内には、入所者の居住区、病院、治療棟、給食棟、文化センターなど入所者を支える様々な施設が置かれている。また、かつてあつた面会人受付小屋跡、消毒小屋跡、免開所跡、見張所跡、火葬場跡、少年・少女寮跡、耕作地跡などが残り、その位置に解説板が立つ。

敷地の一番奥まったところに人権啓発交流センターハンセン病歴史資料館がある。およそ 90 年にわたって続けられた誤った国の隔離政策や地域社会の差別・偏見の歴史を学び、ハンセン病への正しい理解と人権を啓発することが目的とされている。全国に 15 のハンセン病療養施設があるが、何れの施設にも同様の資料館がつくられている。隔離に都合がよい離島にハンセン病の療養施設が置かれた例が多いが、私もこれまでに岡山県の長島にある邑久光明園、長島愛生園、また香川県の大島にある青松園の類似施設を見学している。



国立療養所宮古南静園の全景（左）、ハンセン病歴史資料館（右）

西平安名崎

療養所から県道 83 号線に戻り、すぐに県道 230 号を北上、さらに池間大橋の手前を西平安名崎に向けて進む。ここは直角三角形をした宮古島の北西端に相当し、南東端の東平

安先と好対照をなす。

岬の手前に駐車場と広場、エビを食べさせるレストランと展望台が置かれている。展望台からは北側に池間島と池間大橋、西側に伊良部島が浮ぶ。

この細長い半島部には2基の風力発電の風車が建っていた。沖縄新エネ開発㈱が所有する狩俣風力発電所で、出力は1基900kwである。ただ、この地区には従前4台の風力発電設備があったが、2003（平成15）年9月の台風14号で2基が倒壊、他の2基も破損が激しいため撤去されている。その後、2007（平成19）年に2基が再設置されたのだった。台風の多いわが国では、風力や太陽光などの再エネ施設はこうした損壊のリスクを抱えている。



西平安名崎の広場とレストラン（左）、2基の風力発電施設（右）

宮古市海業センター

西平安名崎から海岸沿いの道を南下する。サトウキビ畑に囲まれた海側に「宮古市海業センター」と書かれた施設があった。宮古島市水産課に属する施設である。事務所に顔を出したが誰もいない。勝手に敷地内に入り施設を見学した。

ここは1985（昭和60）年に「沿岸域の重要魚介類の大量種苗生産放流、栽培漁業の啓蒙普及を行うことで、水産資源の維持増大を図り沿岸漁業生産の向上に寄与すること」を目的に開設されたいわゆる地方自治体が運営する栽培漁業センターだった。当初はミナミクロダイやハマフエフキ、クルマエビ、シラヒゲウニ、その後はタイワンガザミ、シャコガイの種苗生産と放流事業を担ってきた。

しかし、あまり成果が上がらなかったためなのだろう、観光業との連携等を狙って海業センターと名前を変え、2014年度に施設を再整備して現在に至る。現在の事業内容は①モズク、海ブドウ養殖、②シャコ貝の陸上養殖、③鑑賞用熱帯魚のストックと流通、④サンゴの陸上と海中養殖などを支援することとしている。つまり種苗放流の事業からは撤退したわけだ。宮古市は漁協の推薦を受けた漁業者を対象に各養殖技術の研修を一定期間積ませて自立を促し、漁業者を増やしていく方針のようだ。

従来の敷地内には古い大きなコンクリート水槽がそのまま残っているが、新しい敷地内には通常アワビの種苗生産に使われているのと同じ細長い水槽とやや深めの水槽が置かれていた。細長い水槽にはシャコガイが飼われている。水槽の脇には氏名と申請日、更新日が書かれており、どうやらシャコガイの陸上養殖をしているようだ。シャコガイはブルーと白の2種類であったが、事務所に種苗生産用のヒレナシジャコを求めるポスターが貼ってあ

ったところをみると、本種を養殖しているのかもしれない。少し深い水槽はモズクの種付けに使われていた。

海岸沿いをさらに南下すると大浦湾に出た。湾内ではアーサとモズクの養殖が行われている。漁港には船外機が5～6隻、陸上に5隻の漁船が陸揚げされていた。港で網を繕っていた老人によると、大浦地区の漁業者は18～20人とのこと。アーサの養殖には家族がいないと無理だと話していた。



海業センターの飼育水槽（左）、飼育中のシャコガイ（右）

沖縄電力第2火力発電所

大浦湾から海側の平良港に向かう。同港の下崎地区に沖縄電力の第二発電所があった。日本の煙突が立ち、ランドマークになっている。近くには沖縄電力の宮古支店もある。

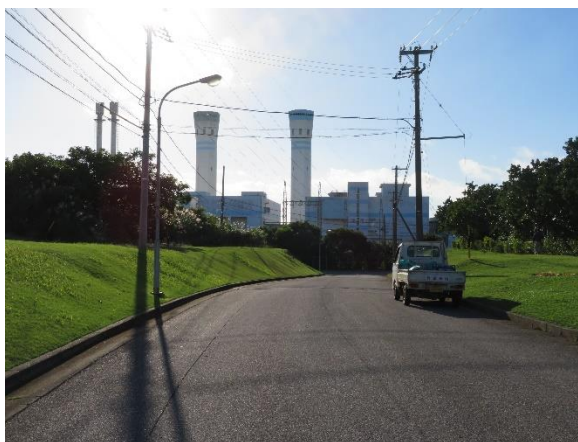
第二発電所は重油の内燃力火力発電所で1～7号機で構成され、出力は79,000kwである。近ごろ、6、7号機は燃料をLNGにも対応できるようにデュアルフェーエルエンジンに新装されたようだ。

最初にできた宮古火力発電所は平良地区の内陸部にあり、ガスタービン3基（1基5,000kwで合計15,000kw）と内燃力1基（5,500kw）である。

つまり宮古島における沖縄電力の発電能力は99,500kwになる。

沖電の発電所から平良港に抜け、国道390号沿いの「島の駅」に寄る。閉店時間に近かったこともあり、生鮮品はほとんど売り切れ、パン屋も宮古そばの店も閉まっていた。雪塩入りのビスケットを土産品として購入する。

途中のガソリンスタンドで給油し、Jネットレンタカーに車を返却する。宮古空港のレストランで一杯飲み、素麺チャンプルを食べる。那覇空港経由で、深夜、羽田空港に戻った。



沖縄電力の第二発電所

【文献】

宮古島市史編さん委員会（2012）：宮古島市史、第1巻通史編・宮古の歴史、宮古島市教育委員会。